

## 病害虫の発生概況

### 〔病害発生概況〕

#### 1. 稲・麦

育苗期では、ばか苗病が福岡、佐賀、大分、宮崎の各県でやや多〜多発生となった。原因として、保菌種子の増加、種子消毒の不徹底、ペノミル剤耐性菌の増加などが考えられた。苗立枯病は鹿児島県で多発したが、それ以外の県では並み〜少発生にとどまった。

本田期でも、保菌苗の持込みのため、ばか苗病が各地で多発した。葉いもちは、北部九州では梅雨明け以降の寡雨多照の影響で一般的に少発生にとどまったが、宮崎、鹿児島両県では多発した。8月下旬〜9月にかけて曇雨天が続いたため、穂いもちが福岡県の一部、長崎、宮崎、鹿児島各県で多発した。

紋枯病は、9月の高温と断続的降雨のため、福岡、長崎、熊本、沖縄の各県でやや多発生となった。ごま葉枯病は、福岡、佐賀両県と沖縄県の砂壤土地帯でやや多発生がみられた。本年は台風の影響が少なかったため、白葉枯病は一般的に少発生にとどまった。縞葉枯病は宮崎県の早期、普通期、鹿児島県の普通期水稻でやや多発生となり、福岡県でも増加傾向がみられた。

近年九州地域で大きな問題となっているもみ枯細菌病は、本年も福岡、佐賀、長崎、鹿児島各県でやや多〜多発生となった。出穂期の高温多雨と効果的防除薬剤がないことが、本病の多発の原因となっている。

地域的に発生がみられたものとしては、稲こうじ病が福岡県で、黄化萎縮病が大分県で、萎縮病が熊本、大分両県で、黄萎病が鹿児島県で、それぞれ並み〜やや多発生となった。

麦類では、3〜4月が高温少雨で経過したため、うどんこ病が各地で多発した。九州地域で大きな被害を及ぼしてきた赤かび病は、大麦では長崎、鹿児島両県で、小麦では長崎、大分、宮崎各県で多発したが、福岡、佐賀、熊本の各県では並み〜少発生にとどまった。縞萎縮病については、各地で抵抗性品種の導入が図られているものの、佐賀、大分両県でやや多〜多発生となった。赤さび病が佐賀、長崎両県で多発し、黒節病が佐賀、大分両県でやや多〜多発生となった。斑葉病が宮崎、鹿児島両県でやや多〜多発生となったが、種子消毒の不徹底が原因と考えられた。

#### 2. 野菜・畑作物

トマト、ナス、キュウリ、イチゴなど果菜類の灰色かび病は、本年も各地の施設栽培で多発した。冬期が高温多雨であったことと、薬剤耐性菌の増加による薬効の低下が原因と考えられた。

本年はうどんこ病も各種作物で多発した。全般的には栽培期間の晴天、乾燥が原因としてあげられるが、イチゴでは罹病性品種「とよのか」の栽培増加、キュウリではブルームレス台木の普及なども一因と考えられた。

ナス科野菜の青枯病は、本年は全般的に並み〜少発生にとどまった。ナスすすかび病は、冬期の高温多雨、薬剤耐性菌の発生などが原因となり福岡県で多発したが、佐賀県では少発生にとどまった。トマトモザイク病は、弱毒ウイルスの利用によって全般的に少なくなっているが、本年は大分県でやや多発生となった。根腐萎ちよう病が福岡県で多発したが、罹病性品種の自根栽培の増加によるものと考えられた。萎ちよう病(J<sub>2</sub>)とかいよう病が大分県で、葉かび病が長崎、大分、鹿児島各県で、それぞれやや多発生となった。ピーマンモザイク病が宮崎、沖縄両県で、斑点病と軟腐病が鹿児島県でやや多発生となった。

キュウリでは、冬期の高温多雨のため、全般的にべと病の発生が多かった。斑点細菌病、炭そ病、菌核病は、並み〜少発生にとどまった。褐斑病は大分、宮崎両県の夏秋キュウリと沖縄県の冬春キュウリで多発した。モザイク病が大分、沖縄両県でやや多発生となった。スイカでは、つる枯病が大分県で、炭そ病が鹿児島県でやや多発生となった。メロンつる枯病が熊本県でやや多発生した。カボチャでは、疫病が宮崎県で、モザイク病が鹿児島県で多発した。鹿児島県では台風22号の通過後に、褐斑細菌病と軟腐病が多発した。

イチゴ炭そ病は全般的に少発生であった。タマネギでは、べと病が長崎、大分両県で、白色疫病が福岡、長崎、大分の各県でやや多〜多発生となった。ネギでは、さび病、黒斑病、べと病が各地で多発した。ニンジン黒葉枯病が長崎県で、サトイモモザイク病が鹿児島、沖縄両県で、ゴボウ根腐病が大分県で多発した。

ハクサイでは白斑病が長崎、大分両県でやや多発したが、他の病害はいずれも並み〜少発生にとどまった。9月以降の多雨により、キャベツの黒腐病、黒斑細菌病、ダイコン軟腐病などの細菌病が各地で多発した。キャベツ黒斑病が大分県で、菌核病が大分、鹿児島両県で多発した。連作圃場、連作年限の増加により、キャベツ根こぶ病が大分県で多発した。

ダイズでは、べと病が熊本、大分両県で、葉焼病が長崎県でやや多発したが、他の病害は並み〜少発生にとどまった。ジャガイモ疫病が宮崎、鹿児島両県で多発した。サツマイモの病害はいずれも少発生にとどまった。

#### 3. 果樹

本年は開花期に曇雨天が続いたため、カンキツ、ブドウ、カキなどの灰色かび病が多発した。一部の県では葉

耐性菌の出現が懸念された。

カンキツでは、そうか病が全般的に発生が多かった。原因としては、越冬菌量が多かったこと、5月の多雨などが考えられた。褐色腐敗病も全般的に発生が多かった。かいう病、黒点病は一部の県でやや多発生となったものの、全般的には並み～少発生にとどまった。赤衣病が沖縄県の一部で多発生した。ピワでは、灰斑病が鹿児島県でやや多発生となった。

ナシでは、うどんこ病、輪紋病が全般的にやや多～多発生となった。黒斑病と黒星病が佐賀県でやや多発生した。福岡県でさび色胴枯病の発生が新たに確認された。

ブドウでは褐斑病、うどんこ病が一部の県で多発生したが、他の病害は全般的に並み～少発生にとどまった。カキでは、炭そ病、うどんこ病が全般的に発生が多かった。

モモでは、炭そ病が鹿児島県と福岡県の一部で多発生したが、越冬菌量が多かったことと5月の降雨が原因と考

えられた。せん孔細菌病が大分県の一部で多発生した。キウイフルーツでは、果実軟腐病と花腐細菌病が福岡県で多発生した。クリ、パイナップル、マンゴウ、バナナでは、いずれの病害も少～年並みの発生にとどまった。

4. 茶 樹

輪斑病が福岡、宮崎両県でやや多発生となったが、9月の低温多雨が原因と考えられた。もち病が宮崎県でやや多発生した。炭そ病は全般的に並み～少発生であった。なお、長崎県で輪斑病の発生が新たに確認された。

5. 特用作物

サトウキビでは、葉枯病と葉焼病が沖縄県の八重山群島の常発地を中心に一部多発生がみられた。黒穂病、さび病は全般的に並み～少発生にとどまった。

イグサ紋枯病は少発生にとどまった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

平成1年 稲主要病害虫の発生面積

(単位: ha)

病 害 虫 名	福 岡	佐 賀	長 崎	熊 本	大 分	宮 崎	鹿 児 島	沖 縄
(病 害)								
葉 い も ち	6,205	5,181	7,700	7,000	14,490	20,235	21,550	36
穂 い も ち	21,839	3,303	6,800	5,000	16,470	21,947	19,873	33
紋 枯 病	45,759	16,047	15,000	30,000	22,990	14,570	22,034	219
白 葉 枯 病	1,246	50	40	200	550	1,030	0	7
も み 枯 細 菌 病	30,721	18,417	9,000	7,000	2,520	4,123	11,823	—
縞 葉 枯 病	6,192	1,185	2,000	1,000	2,220	2,689	8,412	1
萎 縮 病	4,260	359	1,600	7,500	2,620	3,657	1,963	—
黄 萎 病	0	0	30	2	—	10	2,439	—
ご ま 葉 枯 病	7,570	2,689	3,000	600	8,540	5,500	13,486	620
ば か 苗 病	17,136	3,600	1,800	100	4,300	2,328	3,887	15
小 粒 菌 核 病	0	0	1,000	100	1,100	0	—	—
心 枯 線 虫 病	211	0	150	100	5,900	340	4,148	18
(虫 害)								
ニカメイチュウ第1世代	51	0	0	20	370	310	0	—
ニカメイチュウ第2世代	40	0	0	25	250	0	—	2
セジロウンカ	49,131	31,807	19,700	10,500	24,500	22,175	5,541	255
トビイロウンカ	32,778	17,950	19,700	27,000	7,450	4,179	4,498	19
ヒメトビウンカ	44,561	6,139	5,000	7,000	6,500	24,946	2,061	18
ツマグロヨコバイ	52,743	26,028	16,000	27,000	22,600	27,354	4,687	229
イネゾウムシ	7,349	1,795	3,500	7,500	4,600	3,980	2,380	22
イネクロカメムシ	108	0	200	100	450	0	—	53
斑点米カメムシ類	2,744	3,590	8,000	3,500	5,200	7,422	525	42
イネツトムシ	3,685	7,180	1,000	3,800	7,570	1,270	2,630	10
フタオビコヤガ	51	0	50	300	1,000	797	散見	11
イネヨトウ	664	359	1,500	5,000	790	634	散見	—
アワヨトウ	2,570	1,795	100	800	130	306	散見	—
コブノメイガ	49,956	27,858	15,000	23,000	27,380	11,744	5,319	290
イネミズゾウムシ	2,680	4,331	5,570	8,100	11,754	13,900	4,755	256
スクミリンゴガイ	5,025	1,282	780	4,267	236	1,082	405	82
総作付面積 (256,770)	52,743	35,900	19,700	52,800	33,773	27,700	33,286	868

注) 宮崎、鹿児島などは早期、普通期の、沖縄は一、二期作の合計を示す。

## 〔害虫発生概況〕

### 1. 稲・麦

セジロウカの主飛来は7月上、中旬に認められたが全体的に飛来は並みないしやや少なめで、その後の発生は鹿児島でやや多め、佐賀、長崎、大分で平年並み、福岡、熊本、宮崎では並みないしやや少なめとなった。沖縄の二期稲では発生が多かった。トビロウカの主飛来も7月上、中旬となったが昨年に続いて本年も飛来量が少なく沖縄を含めて全般的に少発生であった。コブノメイガはウンカ類とほぼ同時に主飛来があったが、福岡、鹿児島など各県とも飛来量が少なめであった。しかし7月以降の増殖が多く発生は平年並みとなった。飛来量に較べて発生が多かったがウンカ類の少発生に伴い防除回数全般に少なかつたためと考えられる。

ヒメトビウカは福岡の早期、早植稲、鹿児島普通期稲でやや多めの発生となったが全般的には平年並みの発生であり、保毒率が1%程度と低いこともあって縞葉枯病の発生は少なかった。しかし発生面積はいずれの県でも増加の傾向が認められている。斑点米を生じるカメムシ類は全般的には平年並みないしやや少なめの発生であったが、福岡、佐賀、宮崎などでは早植、早期稲で、鹿児島では普通期稲で発生がやや多めとなった。沖縄は一、二期稲とも少発生であった。

イネミズゾウムシは全般にやや多ないし多めの発生であり、ほぼ九州全県で発生面積の増加が続いている。福岡で新たに27市町村に拡大した。鹿児島では早期稲地帯の全域で発生がみられ、普通期稲でも発生が確認された。また沖縄県では八重山群島で侵入が確認された。暖冬により越冬量が多かったことが多発生につながると解析されている。被害はそれほど大きくない。

スクミリンゴガイでも実際被害は一部でみられるにとどまっているが、発生地域は各県とも拡大を続けている。暖冬により冬期の生貝率が目立って高かったことと、水田内では防除が可能であるが、用排水路における防除法が確立されておらず捕獲作業が主体となっているため水田への再侵入と分布の拡大を阻止しにくい問題点が各県から指摘された。麦では佐賀の小麦でシロトビムシとアブラムシ類がやや多めの発生であった。

### 2. 野菜・畑作物

ハスモンヨトウは福岡、鹿児島などの秋ダイズで局地的な多発生がみられたものの全般的にはダイズ、サツマイモで少発生であった。ダイズのカメムシ類では長崎、熊本、大分などでアオクサカメムシ、イチモンジカメムシを主とする誘殺が目立ち8月下旬ないし9月以降圃場

でも生息虫が認められるなど、各県とも平年並みないし多めの発生となった。また一部で被害粒率が高くなった。大分ではヒメコガネ、ドウガネブイブイなどコガネムシ類の発生面積が多く、鹿児島ではサツマイモでイモキバガ、エビガラスズメの発生が目だったが実被害は軽かった。

シロイチモジヨトウは大分県のネギで例年より早い7月に発生がみられ、鹿児島県のエンドウでは1988年には11月、'89年には9月から被害が認められていずれも多発生となった。鹿児島では北薩地域に発生が拡大し、また冬春イチゴなど被害作物の種類が拡大が進んでいる。野菜類のハスモンヨトウは平年並みないしやや多めで佐賀、長崎、大分、鹿児島の冬春のイチゴ、冬キャベツなどで発生が多かった。

ミナミキイロアザミウマは鹿児島の冬春ピーマン、鹿児島、大分のナスで発生が多かった。効果の高い薬剤が少ないため野菜類の生育初期から物理的な手段を組合せた徹底防除が必要となるなど防除が難しい害虫であるが、本年は路地栽培を含めて全体的には並みないし少なめの発生となった。

### 3. 果樹・茶樹

6～8月の好天とヒノキとスギの穂果が多かったこととあわせて、8月以降カメムシ類の発生が全体に多めとなった。沖縄を除いて福岡、佐賀など九州各県でカンキツ、カキでカメムシの多発生が問題になった。果実の時期が早いモモとナシでは発生が少なかった。カンキツのミカンハダニは6月の発生が平年より多く次いで秋期の好天のため9月以降宮崎を除く各県で多発生となった。ナシのハダニ類も福岡、長崎、大分で8月以降多くなった。

カンキツのヤノネカイガラムシは局地的に多発生したが、全体的には被害は少なかった。福岡、佐賀、熊本のカキにおけるカキクダアザミウマの発生は前年並みないし少発生であったが発生地域は拡大しており鹿児島、長崎で新たな発生が確認されている。

暖冬のため鹿児島の茶で春期のカンザワハダニ、夏期にチャノキイロアザミウマの発生が多かった。その他の茶樹害虫はクワシロカイガラムシを含めて平年並みないし少なめの発生となった。

サトウキビのカンシャクシコメツキ、カンシャコバナガカメムシは沖縄、鹿児島とも平年並みの発生であり、宮古でアオドウガネの発生がやや多くなった。福岡、熊本のイグサのイグサシンクイムシは平年並みの発生であった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)